

風が吹いたら

二丁

「五十円玉二十枚の謎」という企画を御存じだろうか。推理小説家の若竹七海が実際に体験したことを元にして持ちあがった企画である。

若竹七海は学生時代にある本屋でアルバイトをしていた。毎週土曜日の夕方になると、男がその本屋に来店し五十円玉を千円に替えてくれと二十枚のニッケル玉を差し出してきたというものだ。それを耳にした東京創元社の名物編集者、戸川安宣氏がこの謎をテーマに競作を発案した。

この競作には若竹七海の「問題編」に対して法月綸太郎と依井貴裕が「解答編」を執筆。この際一般公募も行われた。想像以上の応募があったため、当初予定していた「創元推理1」での掲載を止め別冊として単行本化された。このときの応募者には後々活躍することになる倉知淳や剣持鷹士もいた。

この企画は数年後もう一度行われ、その際に集まった優秀作品は「新・五十円玉二十枚の謎」としてまとめられ出版されている。

「二丁さん、"五十円二十枚の謎"って、御存じですか？」

我らがKミステリクラブの会長、下田さんが僕にそう聞いたのは、いつもの定例会評会がちょうど終わったときだった。

「ああ、あれですか。企画は知っていますけど、まだ読んでないですね」

鞆に資料を片付けながら答えた。僕は二丁健司。このKミステリクラブの会員で、高校二年生だ。社会人ばかりのこのクラブでは最年少である。

午後の日差しが僕の目を差し、思わず目を細めた。

「そうですか。実はですね、今度の会誌であの企画をやってみようと考えているんですが」

下田さんは言いながらずれた眼鏡を直した。僕が所属するこのKミステリクラブでは年に一回会誌を作製する。原稿の締め切りまでまだ数カ月間があった。できれば書き下ろしで何か創作を載せるつもりでいたのだが、肝心のプロットがさっぱり思いつけないでいた。まだ時間があるからと楽観視しているが、だらだらしているとまた去年のように過去の使い回しを載せることになるのは目に見えている。

「面白そうですけど、原稿が集まらないんじゃないですか？」

「そうですよねえ」

腕を組んで下田さんは考え込んだ。「でも会誌全部をその企画でやろうというつもりはないんですよ。一応書けそうな人はぜひ、という形でやってみようと思ってて」

「下田さん、なにか書くアイデアがあるんですか？」

自分がやりたいネタがあるからこそ企画したのでは、と僕は考えた。

「いや、そういうわけではなくて」

下田さんはとっておきの秘密明かすように嬉しそうに言う。

「わたしの親戚が似たようなことに遭遇しているそうなんですよ。きみの地元に住んでいる子なんです。それでちょっとやってみたくなくて」

下田さんはその人の勤め先を告げた。僕の自宅近くの書店だった。二日に一回は冷やかに行く。

「へえ、あそこに。どんな人なんですか」

「きみと同じくらいの女の子、背の高い割と綺麗な子なんだけど、しばらく前からその本屋でアルバイトをやっているらしいんですよ。で、この間法事で会った折にその話を聞いたんですけど」

面白そうだ、できれば話を訊いてみたい。ネタを得られればなお良し。

「ふうん、面白そうじゃないですか。ちょっと話を聞いてみたいですね。もし何か浮かべば会誌の原稿も書けるし」

「会ってみますか」

「断る理由が無いですね。他の人も誘ってみますか？」

僕らは他のメンバーにも声をかけた。二つ返事でOKかと勝手に決め付けていたのだけれど、意外にも全員欠席。現場が遠すぎる、というのが主な理由だった。彼女の住む富山は僕にとっては地元だが彼らにとっては車で一時間半はかかる距離なので、まあ無理もない。

結局、僕と下田さんだけで後日コンタクトを取ろうという話になった。

3

問題の女性、前原千恵との面会はそれから二週間後の日曜日に実現する運びになった。下田さんが忙しい中の間を縫って約束を取り付けてくれたので僕は大きい助かった。

待ち合わせ場所は問題の書店の横にある喫茶店"メル"だった。僕はあの極悪非道の銘探偵から名前を取ったのでは、と以前から考えているのだが本当のところは定かではない。そのうち思いきって尋ねてみようと思い始めて、そろそろ半年が過ぎている。

約束の時間の十五分前に僕は家を出た。愛用の錆びた安物自転車に跨り目的地を目指す。店までは五分もかからない。秋の風が容赦なく身体を吹きつける。上着を羽織れば良かった、と後悔した。といっても元々人前に出られるような洒落た上着を持っていないし、上着を買いに行く上着もっていない。洒落っ気とは無縁の人間なのだ。最近は開き直りつつある。

信号を一つ渡るともう目的地だ。僕は自転車を敷地に乗り入れる。少し説明を加えておくと、書店とメルは目の前の国道から一メートルほど低い土地にある。元は水田だったところを買い上げて埋め立てた土地である。この敷地の出入り口は今僕が入った東側からの埋め立てた道があるだけで、他の場所からは乗り入れられない。待ち合わせの喫茶店は書店を通り過ぎたところにある。よく大型書店には喫茶コーナーがあって一服できるようになっているが、ここはそれほど店

舗が大きいのでそれがない。メルがここに店を出させてくれと書店に交渉したのはその立ち位置になることを狙ったからだろう。

兼用の駐車場にはまだ下田さんの車が見当たらない。腕時計を見るとまだ十分ばかり時間があつたので、僕は某作家の新刊を買っていくことにした。自転車を書店東側の入り口に停める。書店には東と西の二か所に入り口がある。

店内に入ると一目散に新書のコーナーに向かう。探究本は見当たらない。僕は舌打ちをして近くの店員さんに聞いてみた。まだ入荷していないそうだ。

ちょうど時間の二分前。僕は西から出てメルに向かう。新刊は、また今度。どうせ積んでいる本は山ほどある。

メルの前で下田さんが待っていた。隣にいる女性は噂の前原さんだろう。先に入っていてくれれば良いのに。

「ちょうど時間ぴったりですね」と下田さん。

「時間にはうるさいもので。中に入らないんですか？」

僕が訊くと下田さんは黙って店の扉を指差した。

"店主体調不良のため本日臨時休業 店主"

メルは中川という中年の店主が一人で切り盛りしている。あまり人好きのしない性格なのかカウンタに客が座っても注文を受ける以外は黙って仕事をしている。なぜ客商売をやっているのか不思議だ。かなり几帳面な人物で、定休日の水曜を除き毎日午前十時半ぴったりに店をあげ、午後七時ぴったりに店を閉める。客が残っていても追い出してしまうそうだ。

「どうでしょう。近くに他の店がありますからそこに行きましようか.....ところでそちらの方が例の？」

「そうです。こちら前原千恵さん」

前原さんは僕に挨拶をした。何度か書店で見た顔だ、レジを打ってもらったこともある。この人だったのか、と妙な感動を覚えた。僕の二つ上、今年短大に入学したらしい。

「よく店に来てらっしゃいますね」

前原さんも僕を覚えていたらしい。返事に困って、お世話になってます、とたぶんずれたことを言った。前原さんは笑ってくれた。

僕らは書店の敷地を出て別の喫茶店へ入った。久しぶりにメルのコーヒーを飲みたかったのだが。五百五十円は少し財布に厳しいが、味は決して悪くない。

喫茶店に入ると小気味良いジャズが耳に入る。有名な曲なのだろうか、音楽はよく判らない。座席が混んでいたのので、僕たちはカウンタに座ることにした。コーヒーを三人分注文する。

少し僕らのクラブの説明をして本題に入った。

「それで、例の五十円の話ですが」下田さんは二杯目のコーヒーに砂糖を入れる。「毎週土曜になると、その人は来るんですね」

「ええ、そうです」

前原さんは答える。

「正確に言うと、毎週土曜日の十時ごろですね。だいたいその前後になるとその人が来て五十円を千円に両替していくんです。店の物には興味がないみたいで、買い物をしていったことはありません。まっすぐレジに来るとそのまま帰ってしまうんです」

「それ、いつからなんですか」と僕。

前原さんは少し考えてから、

「そうですね……二か月くらい前からでしょうか。それからは毎週欠かさず」

「土曜日だけ、なんですか？ 他の日に来たことは」

「土曜日だけです。同僚にも聞いたので間違いありません」

「どんな人物でした？ 見覚えは？」これは下田さん。コーヒーを舐めながら質問をぶつける。

「ええと、どう言えばいいんでしょうね。なんだか怪しい人というか……たぶん男の人だとは思いますが。サングラスをしていて、髪には白い物がまじっていました。けどなんだかそれがいかに作り物っぽくて。たぶん鬘だと思います。手の癖なのか、ずっと車のキーを弄っていました」

「鬘にサングラスねえ」

僕は続けて言う。

「あからさまに怪しいな。その五十円玉って偽物なんじゃないですか。マネーロンダリングってやつ」

「同じ店を何度も使うっていうのは考えにくい」

反論したのは下田さんで、前原さんも、「そうですね。それに偽造硬貨なんじゃないかってことは店でも一度話に挙がって、警察に確認してもらったんですけど、間違いなく本物だったそうですよ」

偽金の線はなしか、もとよりそれは予想していた。むしろ外れていて嬉しい。あまりにもこの説はありきたりだ。こうでなくは面白くない。

「次にすぐ思いつくのは……」下田さんが言う。

「前原さんが目当て、という可能性ですね。その人物は前原さんに好意を持っていて、なんとか接点を持ちたかった。それで奇妙な注文をして印象を残したかった」

「でも自分の印象を残したかった、という目的でわざと目立つ注文をしているのに、変装なんてするのでしょうか？ 行動がちぐはぐですよ」

「そうですね……この二つが違うとなると……難しいですね」

いつのまにか下田さんは二杯目を飲み干していた。口を拭って彼は続ける。

「考えられる目的をとりあえず分類してみましようか。」

一、五十円玉を手放したかった場合

二、千円札が必要だった場合

三、対象の五十円玉を手放したかった場合

四、対象の千円札が必要だった場合

五、書店に五十円玉を渡したかった場合

六、書店から千円札を奪いたかった場合

七、書店に対象の五十円玉を渡したかった場合

八、書店から対象の千円札を奪いたかった場合

九、店員の注意を引きたかった場合

十、レジを塞いでおきたかった場合

今思いつくのは、とりあえずこんなところですか」

十番目は気がつかなかった、僕は素直に感心する。

下田さんは三杯目を頼もうか少し迷って、結局注文した。カフェイン中毒なのだろうか。僕も気をつけなければ。

「対象の、というのはどういうことですか？」

前原さんが尋ねる。

「その五十円や千円でなければいけなかったのか、という違いです。例えば偽造硬貨の洗浄ならば三の場合に含まれます」

納得したようだったので口を挟ませてもらう。

「四番目と八番目は現実問題として難しいんじゃないですかね。引き渡される千円札がどれか犯人には予測がつかない。回収したい千円札があるなら他の方法で根こそぎ持っていくはずですよ」

犯人、という言い回しを使ったせいかな前原さんは苦笑した。

「確かにそうですね。わたしが共犯ならば別でしょうけど、だったらそもそもこの集まりは実現しなかったはずですよ」

「二の場合にも疑問が出ますね、四番にも当てはまることですけど」

下田さんは言う。

「二、四の場合なぜ毎回五十円なのか、ということに説明が付きません。五百円でも百円でも良かったはず。にも関わらず毎回五十円だけというのは納得がいきませんね」

下田さんは腕を組むと眼鏡を外して目頭を押さえた。

「九番目で思いつきがあるんですが」

僕は小さく手を挙げた。

「両替は陽動だった、という可能性です。有名なパターンですが」

「えっと、どういうことですか？」

「つまりですね、前原さんが両替している間に他に注意が払えなくなります。その間に他のレジからお金をちょろまかすとか、レジの前の商品をポケットに入れるとか」

「無理ですよ。その時間帯は殆どわたしがレジを担当しますが、他の人一人くらいはカウンタで作業をしていますからわたしの注意を引いてももう一人に見つかるはずですよ」

「しかし見つかるか見つからないかは確率の話で——」

「犯人からすれば、そんな不確定な状況をわざわざトリックで作らないはず。更に欠点を挙げるならそれも五十円である必然性がない。むしろもっと手間のかかるように調整して頼むはずですよ」

僕の悪あがきを下田さんが容赦なく打ち砕く。降参だ。

「十番目の場合はどうでしょうか？」

肩が凝ったのか下田さんは首を回す。僕も背延びがしたくなった。まだ若いのに、どうにも肩

こりが酷いのだ。

「それもどうでしょうか。両替のせいで特別レジが混んだ覚えはないですし。塞いだからといって何も変わらないと思います」

これも却下。僕はもう種切れだった。

下田さんに目をやると、彼も同じらしく考え込んでしまっていた。一度膠着するとなかなかアイデアは出ないものだ。

「一度張り込んで後を追ってみましょうか？」

とりあえず言ってみた。

「きみがやるの？」

と下田さん。彼には仕事があるので無理だろう。

「いやあ、実は僕もその時間帯はコンビニのバイトが。しばらくはどうしても休めないですね」

安い時給で休みの都合もなかなかつかないのでもそろそろ辞めたいと思っている。

「あの、レジは監視カメラで見張られていますよね？」

「ええ、上の方から見下ろす形で設置されています」

「録画を見せていただく、というわけには……いきませんよね」

「それはちょっと」

前原さんは困惑した。まあそうだろう。

「たぶん無理でしょうね。警察から令状が出たわけでもないですし。勝手に持ち出したらわたしの首が飛びます」

「ですよね」

「監視カメラの映像が無理なら、自前のカメラでも問題がありますか？」

下田さんが言う。前原さんは少し考えてから、

「どうでしょうか。録画を観せるよりはずっと大丈夫だとは思いますが……」

「あ、カメラなら僕が用意できますよ」

僕が後押しする。彼女は結局折れて見つからないように仕掛けましようと言った。

僕は一度家に戻ってビデオカメラを持ってきた。先月買ったばかりのもので、解像度が千九百二十×千八十のフルハイビジョン対応で内臓HDDに九十分の連続録画が可能。五万円は手ごろな買い物だったと思う。

「高そうですね……壊さないか心配です」

「まあよほどのことがない限り大丈夫ですよ」

一通り録画のやり方を説明した。前原さんは割と飲み込みが早くて非常に助かった。

「レジカウンタの後ろに仕掛けようと思います」

「上に何か被せて見つからないようにした方がいいでしょう」

下田さんは興味深げにカメラを見ながら言った。手にとって構えてみる。なかなか様になっていた。運動会のお父さんといった感じだ。

前原さんに予定が入っていたこともあり、カメラを託してこの集まりは解散になった。財布を出そうとした僕と前原さんを押しとどめて、下田さんが勘定を済ませた。まったく申し訳ない。

「会誌の企画ですけど、ちょっと趣旨を変えましょうか」

前原さんを見送ってから下田さんは言った。

「この謎をテーマとした競作という形ではなく、調査の顛末をそのまま小説化して掲載したら面白いと思いませんか？」

未解決になったら未解決で、探偵ルポという名目でエッセイにしてもいい」

「いいんじゃないですか」

僕は足をほぐしながら答えた。長時間じっとしていると体が痛くなる。もう夕暮れ時だった。空がすっかり赤くなっている。

「面白いと思いますよ。下田さん書いてみたといいですよ」

「いや、わたしはきみに頼もうと思うんですが」

え、と僕は聞き返す。丸投げですか。

「きみの地元だから必要になれば調査もしやすいし、わたしは他にも載せたいものがあるから」

「いや、それなら僕だって……ごめんなさい、ネタないです」

というわけで、今回の件は僕が責任持って結果をまとめることになった。やれやれ。

下田さんと別れて家路についた。安い作りの愛車に乗って約五分の行軍だ。ペダルに体重をかけながら、僕は心と疑問を持った。

—どうして五十枚じゃないんだ？

4

家に帰って僕はとりあえず部屋着に着替える。着古した青いジャージに腕を通すと不作法に横になる。

さて、前原さんから連絡があるのは早くて土曜日。丸一週間もある。それまでただ待っているのもなんなので、予備調査でもしておきたいところだ。といってもなにをすればよいのだろう。

しばらく考えて、近所の店を回り同じようなことが起きていないか聞き込みをしてくることにした。面倒だけれど着替え直してまた自転車を引っ張り出す。慌ただしいことこの上ない。

とりあえず書店から半径二キロ程度の店を回ってみることにした。どうせ田舎なので店の数はさほど多くはないのだが、一軒一軒が離れているから少々手間だ。どうせ今日はもう暗くなるのだし、一週間のうちにのんびり回ろうと思った。

三日ほどかけて回った結果、周囲の飲食店や小売店、パチンコ屋などの娯楽施設等々すべてにおいて例の五十円男（女かもしれないが）は出没していないことが判った。周辺の銀行の窓口に行ってみても答えは同じだった。

やはりあの書店でなければいけない理由があるようだ。

四日も時間が余ってしまったが、その期間にとりあえず事件の概要と調査結果を書いた。下田さんに送ると「進展に期待する」と返事が来た。

書き上げて気が大きくなっていたこともあり「おうよ任せとけ」と返事を作ってしまった。幸い送信エラーで向こうに届かなかったので助かった。危うく新しい黒歴史を作ってしまうところだった。若さ故の過ちというのは恐ろしい。

問題の土曜日になった。僕のバイトは午前中だけだった。帰ってからは落ち着きなく連絡を待

っていた。夕方には仕事が終わると前原さんは言っていた。たぶんその帰りにこちらに寄ってくれるだろう。いつもより濃いコーヒーを呷り気を落ち着かせた。

前原さんがインターホンを鳴らしたのは午後五時過ぎ。うとうとしかけていた僕は慌てて飛び上がり玄関に駆けつけた。

「お仕事お疲れ様です。で、来ましたか？」

「来ました。いつもの時間にやって来て五十円玉を両替してくれって」

前原さんはハンドバックからカメラを取り出し僕に渡した。上がっていくように勧めたのだけれど、彼女はもうすぐ夕食だからと辞退した。僕は進展があれば連絡すると言って前原さんを見送った。

さあお待ちかねだ。僕は自室に帰るとパソコンにカメラを繋いだ。プレイヤを開いて再生させる。

誰かの手が写っていた。前原さんだろう。すぐに手は離れてレジの様子を映し出す。この書店のレジカウンタは南側の壁に面して、東西両方の入り口の間の中間の位置にある。上に少し写っているのは被せてある布か何かだろう。画面右下のデジタル時計によるとこのとき午前九時四十分。十時前後という話だったからそろそろ来てもいい頃だ。前原さんはレジを開けて小銭を整理していた。ずっと背中を眺めていてもしょうがないので問題のシーンまで早送りにする。九時五十分頃の映像で早送りを止めた。画面右側から怪しい男が映り込んだからだ。

黒いサングラスをかけて白髪之交じった頭髪、たぶんこいつだろう。右手で鍵をいじっているのが見えた。

「すまないけど、これを両替してくれないか」

指向性マイクがうまく音を拾ってくれていた。声を作っているのか妙に聞き取りにくい発音だった。

「かしこまりました」

前原さんは答えると小銭を数え始める。残念ながら肝心の五十円玉はよく見えない。

二十秒ほどで数え終わって、前原さんは千円札を渡す。受け取ると、そいつは千円を乱暴にポケットに突っ込んだ。前原さんがレジに五十円を入れ一札すると、口をもごもご動かしてから左へフェイドアウトした。礼を言ったのだろうか。

たった二分程度のやりとりだった。僕は巻き戻してもう一度観てみた。

よく見ると、録画はその後も続いていた。止め忘れたのか、前後の状況も移しておいた方が良かったのか。たぶん前者だろう。

一応残りのシーンも早回しで観てみることにした。あまり忙しくはないようで、前原さんの鑑賞会が続く。あまり妙なところを眺めないようにしているとレジにお客がやってきた。画面右からフェイドインした中年の男性は青いジャージに身を包み漫画の単行本を差し出した。前原さんはそつなく会計を済ませた。なにもおかしなところはない。彼はそのまま右にフェイドアウトする。

またしばらくはなににも動きがなかったが、十時四十分頃になると女の子が右から映り込んで

きた。

あれ、この子見覚えがあるぞ。

黒い綺麗な髪を肩まで伸ばした彼女は週刊誌を前原さんに渡した。財布から千円をとりだす。お釣りを受け取ると彼女は左にフェイドアウトした。別に不審な点はない。

そこから先でも何人かの客がレジで精算していた。買っていったのはどれもベストセラの文庫本だった。

録画は十一時十分で止まっている。僕は女の子のシーンまで巻き戻した。

顔がよく写っている場面で映像を止めた。やはり見覚えがある。同じクラスの雨宮鈴だった。

時折話す程度の仲だが、この近所に住んでいるとは知らなかった。勝手なイメージで市街地の方に住んでいるとばかり思っていたのだが。彼女が買っていたのは二冊の漫画雑誌だった。タイトルはよく見えなかった。

なにかが判りかけていた。

ともかく僕は動画を下田さんに送ることにした。そのままではサイズが大きすぎるので、エンコードして数十メガまで圧縮させる。解像度や画質をかなり落とすことになるが、観る分にはあまり支障はないはずだ。クアッドコアにここぞとばかり負荷をかけて三十分ほどで仕上がった。メールに添付して下田さんに送信する。

もう一度両替のシーンを見直した。頭に浮かんだ発想を整理する。

たぶん、間違いない……と思う。ともかく確認を取ろうと思った。

前原さんに電話をかける。夕飯だと言っていたが、出てくれるだろうか。功を焦る性分なので今すぐに話したかった。

十回ほどコール音が鳴った後で前原さんが出た。

「二丁ですけど、今大丈夫ですか？」

「あ、二丁さん。別に構いませんよ」

僕は質問すべきことを脳内で整理しながら切り出した。

「録画を観ました。十時ちょっと前に来たのが問題の人ですね」

「そうです。いつもだいたいあの時間です」

「話に聞いたとおりに変装しているようでしたが、毎回同じ人物だと言い切れますか？」

「そうですね……それは間違いないと思います。声の感じも同じでしたし」

「判りました。もう一つ、彼はいつもまっすぐレジに向かってくるんですよね？」

はい、と前原さんはしっかり答える。

「その後はどうですか？ どこかの棚を見に行ったりする様子はありませんか」

「いえ、そのまままっすぐ帰られます。両替が済んだらもう用はないみたいで」

ここまでは予定調和。問題は次の質問だ。

「毎回決まって録画の通りなんですか。例えば――」

前原さんは少し考えてから言った。

「そんなことはありませんでした。いつもあの録画の通りだったはずですよ」

心の中で喝采を上げた。気分はエラリークイーンだ。僕は更に外堀を埋める。

「あの時間帯、店は混むんでしょうか」

「いえ、あまり。駐車場がいっぱいになることはまずないですね。午前中は特に少ないです。今日もそうでした。窓からちょっと外を見ましたけど、三台ぐらい止まっていたくらいです」
「つまりどこでも好きな場所に車を止められる状態だった、と考えていいわけですね？」
「そのはずです」
「判りました。ところで、あの店には自動販売機がありますよね？ たしか入り口のところに」
「二台あります。どちらも同じメーカーの」
「僕の記憶ではどちらも東の入り口に設置されていたと思うんですが」
「どちらもそこに設置されています。敷地の入り口に近い分あそこの方が人通りが多いですから」
「西にはなにも設置されていないんですね」
「はい」
「ちょっとしたゲーム機のようなものもなかったはずですよ」
「そのはずです」
僕はなるべく興奮を抑えながら質問を続けた。
「証明写真の撮影機とか、その他諸々の設備も――」
「ありません。東口の自販機があるだけです。他にはなにも。設置してもたいした儲けにならないみたいで」
王手詰み。

一つ目の挑戦

この時点で、ある問題に関するすべての手がかりが提示されました。

"二十枚の五十円玉を千円札に両替している人物は誰か？"

フーダニットを解くことが全容の把握の近道となるでしょう。御随意に先へお進みください。

5

残りは半分だ。僕は質問のベクトルを変えた。

「録画は問題の人物が帰った後も続いていました」

「あ、すみません。止めるのをすっかり忘れていて……」

前原さんは申し訳なさそうに謝った。特に謝られるようなことでもないのだが。

「いえ、特に問題ありませんからお気になさらず。女の子が雑誌を買いに来ていましたよね？」

あの子はいつも来るのでしょうか」

そうです、と前原さん。

「なにか関係あるんですか？」

「いえ、そういうわけではなくて」と僕は嘘をついた。「実はあの子、僕のクラスメイトなんですよ」

「え、そうなんですか」

慎重に聞き出さなければならなかった。頭を回転させて言葉を選ぶ。

「いつも土曜日のあの時間に？」

「鼻眞の雑誌の発売日みたいなんです。あの時間には店頭で並ぶのを知っているらしくていつもあの時間になると買いますから簡単に会えますよ」

なにか勘違いしたらしかったが、その方がやりやすい。幸運に感謝しながら先を続ける。

「彼女の買っていた雑誌って幾らですか。話題合わせに僕も読んでみたいと思うんですが」

「二つ合わせて六百五十円です。三百円が一冊と三百五十円が一冊」

前原さんが雑誌の名前を教えてくれた。

知りたいことはだいたい判ったので、僕は礼を言って電話を切った。差し当たってできることは終わった。

雨宮に会わなければ、僕は彼女の整った顔を思い出す。出るところが出たその体は黒いブレザーがよく似合っていた。成績優秀で性格も良好となればさぞかしもてることだろう。そういえば、大人びた雰囲気や体つきが前原さんに似てなくもない。彼女に確認しなければいけないことがあった。随分前に聞いたことなのであまり自信がなかったからだ。

僕の考えが当たっていたら、会誌に原稿を載せるつもりはなかった。下田さんには適当に言いつくろって昔書いた使い回しを渡そう。もちろん前原さんにも答えを教えるつもりはない。

うまく立ち回らなければ。

僕はほくそ笑んだ。

6

月曜日は分厚い雲が覆っていて朝からずっと薄暗かった。湿度が高くて過ごしにくい。その日最後の講義が終わる頃になると雷がなりだした。雷鳴に急かされながら僕は彼女の姿を探した。

彼女は自分の席でのんびり教科書を片付けていた。確か帰宅部だったはずなので声をかけるチャンスはあるはずだ。できれば人に見られたくはなかった。

しばらく遠巻きに監視していると彼女は席を立って教室を出た。鞆を置いたままだから、十中八九行き先は購買部だろう。僕は先回りした。

購買部自体はもう閉まっているのだが、横に設置してある自動販売機はまだ動いている。

僕は自販機の前で財布を取り出して雨宮を待った。言うべきセリフを頭で確認する。一分もしないうちに彼女はやって来た。

僕は声をかけた。

「あの、悪いんだけど小銭を貸してもらえないかな」

俯いていた雨宮はこちらを見た。ちょっと驚いたようだったので、不自然だったか、と不安になった。

「財布にお金を入れ忘れててさ。五十円しか入ってないんだよ。十円貸してもらえればコーヒーが買えるんだけど」

「貸すのはいいんだけど、いつも細かいお金は持ち歩かないの」

ああそんなこと前に言ってたね、と相づちを打つ。親切にも彼女は僕に奢ってくれた。僕はありがたく御馳走になった。味が薄くて熱湯を飲んでいるようだった。—これだから安いコーヒーは。

「"メル"って喫茶店知ってる？」僕はそれとなく水を向ける。「本屋の横にあるんだけど」

「あそこなら良く行く。雑誌を買って、あそこでコーヒーを読むのが好きだから」

へえ、と大きさに驚いてみせる。

「店のおじさんも面白いしね。それがどうかした？」

「いや別に。コーヒーありがとうね」

バイトだから、と取り繕って彼女と別れた。バイトがあるのは本当だったのでちょっと憂鬱だった。

電車で一時間ほど揺られてそのまま職場へ直行した。まずいことに強風で電車が少し遅れた。ついてない。駅に着くと雷に追い立てられながら職場へ急いだ。けれどまあ、これももう少しの辛抱だと思うと少しは気が紛れる。

客の理不尽なクレームを躲しながらなんとか勤め上げると、もしかしたら辞めさせてもらうことになるかもしれないと上司に伝えた。

雨宮に会ったことで、僕は確証を持っていた。家に帰り着くと、とりあえず下田さんに送るメールを作った。

"例の件ですが、どうにも行き詰まりそうです。もうしばらく頑張ってみますが、原稿にするのは難しいと思います。それとは別に書きたいネタが浮かんだので、そちらに変更してもいいですか？"

不自然かな、と思い一度手を止める。あまりにも諦めが早すぎるように見えた。もう少し間を置いて伝えた方がいいか。まあ、それはそれで考えるとして—

僕は電話帳で中川さんの電話番号を調べた。今の時間はメルにはいないだろう。深呼吸をして心を落ち着けてから電話をかける。幸いすぐに繋がった。

「はい、中川ですが」

「あ、遅くにすみません。中川庄一さんですよ。メルって喫茶店を経営されている」

「はあ、まあそうですけど」

明らかに不審がっていた。僕は大きく間を取って演出効果を狙ってみた。

「—五十円玉の件で、ちょっとこれから話したいことがあるんですが。もちろん会っていただけますよね」

気まずい沈黙が続いた。

「なにが、目的ですか……」

「別に、まあとりあえず話をしましょうよ。どうしても嫌だと言うならそれでも結構ですけど」

彼は掠れた声で、今から店に来てください、と言った。

二つ目の挑戦

以上ですべての手がかりが記されました。

"なぜ二十枚の五十円玉が千円札に両替されたか?"

よろしければその理由を"推察"してください。

では、御随意に先へお進みください

7

メルの前に自転車を止めた。夜になるとぐっと気温が下がり息が白くなる。年々秋が短くなっている気がした。まあ夏が長くなるよりは幾らか良いか。

扉にかけられた看板は"CLOSE"となっていたが店には明かりが点いている。鍵はかかっていたので、僕はそのまま中に入った。

店内は緩く暖房が効いていた。僕は着古した上着を衣紋掛けにかけた。明日服屋に行ってみようか。たまにはちょっと高い服も着てみよう。

中川さんはカウンタの向こうにいた。磨くマグカップもないので所在なさ気だ。ベルが鳴ったので僕には気がついてはいるはずだが"いらっしやい"の一言もない。

まあいいか。

僕は中川さんの前に座った。

「コーヒー、淹れてもらえませんか」

黙って彼は後ろを向くと薬缶に火をかけた。

「きみは、何度か見た顔だね」

コーヒーメーカをセットしながら彼は言う。僕はにこにこ笑いながら答えた。

「そうですね。最近あまり顔を出してませんでした。ここのコーヒー、結構気に入ってます」

そりゃどうも、彼は感情を込めずに言った。嬉しそうには見えない。まあそうだろう。

コーヒーが入るにはまだ時間がかかりそうだったので、僕は話を切り出すことにした。

「実はですね、一昨日のあなたの行動を見せていただきました。レジの後ろにカメラを仕掛けていたんです。というのも前原さん—あなたの対応をしていた店員さんから話を伺って興味を持ったものでして。直接張り込めれば良かったんですが、あいにく時間が取れずにそうやって実際の現場を見たわけです」

お湯が沸いたらしい。中川さんは火を止めてお湯を機械に注いだ。

「それで？」

「伺っていた通り、土曜日の十時頃不審な人物が現れて五十円玉を二十枚、千円札に替えていきました。

まあいったん奇妙な両替自体は脇に置いておくとして。それ以外のある行動が僕の目を引きました。

彼は画面右から現れて、両替を終えると左から出ていきました。これ、よく考えてみるとおかしいことなんです」

中川さんはちょっと考え込んだ。

「どうして？ 別に大したことじゃなさそうだけど」

「手の癖なのか、その人物は車の鍵を弄んでいました。つまり車で来ていたんです。これはいいですか？」

マグカップにできたコーヒーを注ぎながら中川さんは頷く。

「それに加えて、前原さんによるとその人物は店の物には興味を示さなかったらしい。入って来るなりまっすぐレジに来て両替を済ませそのまま帰って行くそうです。

なのにその人物は右から来て左へ消えた。カメラはカウンタの中に設置していましたが東から現れて西へ消えたことになります」

ブラックのまま口に含んだ。悪くない、決して悪くない。やはりコーヒーはこうでないと。

「別におかしくない気がするが。あの書店は入り口が二つある」

「いいえ、おかしいんです。なぜなら車で来ていましたから。彼の行動を整理するとこうなります。

まず車を敷地に乗り入れる、そして東口から入店する。そして両替を済ませ西口から外へ出る。そして車に乗って帰った」

「なにか問題が？」

問題です、と僕は強調していった。

「本来そんな流れにはならないんですよ。彼はまず東口から店内に入りました。その理由としては二つ考えられます。

一、車から近かったから

二、なんらかの理由で東口から入らなければならなかったから

一の場合は、まあ説明しなくてもお判りいただけるでしょうが、一応説明しておきましょう。

この場合彼の行動はおかしなことになります。わざわざ車から遠い西口から外に出ていることになるからです。

一が真の場合、彼は画面右から現れて右に消えなければならない」

中川さんは自分の分のマグカップも用意してコーヒーを注いでいた。香りを嗅ぎながらカウンタを出て僕の横に座った。

「—そうだね。きみの言うとおりで」

「では二の場合はどうか、これも現実の行動と矛盾します。あの時間帯、駐車場は殆ど空いています。録画を撮った日前原さんは窓から外を見たそうですが、二三台停まっているだけだったそうです。駐車場はどこでも好きなところに駐車できる状態にあった。

だから東から入らなければいけない事情があるのなら車は東口の近くに駐車されたはずです。だからこの場合も画面右から現れ右に消えなければならない。

けれども実際は左へ消えた」

一つ一つ話を飲み込んでから彼は頷いた。

「まあ、きみの話は一応筋が通っていると思う。では結局どういうことになるのかな」

「東口から入店した理由は特定するのは意味がない、ということです。考えるべきは"なぜ西口から出てたか"になります。

ではこの場合はどうなるのか。先ほどの一の理由はなりたちません。東から入った以上どの場合でも車に近いのは東口だからです」

彼は相づちを打つ。コーヒー舐めてから僕は続ける。

「彼は"西口から出る合理的な理由"を持っていた。では東口と西口ではなにが違うのか」

「飲み物でも買ったんじゃないか。自販機があるだろう」

「自販機があるのは東口だけです。西口にはありませんでした。彼は東口になくて西口にあるものに用があったはず。それはなにか」

溜息をついて、中川さんは言った。

「この店か——」

「東になくて西にあるのはメルだけです。西側では敷地に入入りできませんから、他のところに行ったと考えることもできません。

彼は両替をした後この店に向かった。それは公理。ここまでは認めていただけますか？」

「認めよう。大したもんだ」

コーヒーを呷って彼は先を促す。

「で、続きは」

「——自分で言っておきながらなんですが、この公理はまた状況と矛盾するよう見えます。

メルの営業時間は午前十時半から午後七時。彼が向かった時にはまだ開店していません」

「営業時間を知らなかったのかな」

「違います」

僕は深呼吸してから答えた。

「なぜなら彼の行動は初めてではないから。毎回録画の通りに彼が行動したことは前原さんが証言してくれています。彼は以前にも両替の後メルに向かっていた。知らないはずはありません。

詰めです。彼は営業時間に関わらず店に来ることができた人物、つまりこの店の店員です。そしてそれは中川さんだけ。

したがって両替をしていたのは中川さんです」

口に出すのは流石に気恥ずかしいので、心の中でだけQEDと呟いた。

「なるほどね」

おかわり飲むかい、彼は言った。マグカップの中身は殆どなくなっていた。お言葉に甘えよう

。カウンタに戻ると中川さんはまたお湯を沸かし直した。

「それで今の話、認めていただけますか」

「そうだね、あいにく気の利いた反論は思いつかない。認めるしかないね。けどさ——」

彼はこちらを向いた。

「だからなんなの？ 認めるよ。俺は自分だと気づかれないよう変装をして、五十円玉を千円札に換えてもらっていた。きみの論証は肯定する。

それがどうしたんだ？ 別にいいじゃないか。好きにさせてくれよ」

「まあ本当にやましいところがないのなら、こんな時間に会ってくれてはいませんよね」

「どうかな」

さて、後半だ。

「では次はあなたの動機について僕の"推察"を話しましょう。

まず一番簡単な答えは千円札が欲しかったから、ですがこれは却下です。二十枚の五十円玉にこだわる必然性がなくなります。他の硬貨が一枚も混じっていないというのは異常です。従ってあなたの狙いは千円札ではなく五十円玉を手放すことにあった。

僕が疑問に思ったのはなぜ二十枚なのか、ということです」

「千円札がほしいから、ではないね。さっきの話と矛盾する。"二十枚の五十円玉"に意味があるわけだ」

言いながら中川さんはおかわりを出してくれた。もちろんブラックでいただく。

「二十枚というと、とても多いように思えますが、実は違います。硬貨は一パッケージ五十枚です。だからかなり中途半端な数なんです。

手放す数は、五十枚では多過ぎて一枚では少な過ぎた。だから二十枚——というのが僕の仮説です。まずなぜ多過ぎてはいけないのか——」

僕はカウンタのレジを指さした。

「あれです。レジにとって五十枚の硬貨は多すぎる」

「そうかい？ 普通硬貨を補充するときは一パッケージを空けると思うけど」

「それは空に近い場合です。あなたが両替に行ったときにレジの中身がどのような状況か判りません。

五十枚入ってちょうど良い、というのは補充するときですから、都合良くそうなっている蓋然性はかなり低い。だから五十枚では多過ぎた。多すぎるとレジには入れられず所定の別の場所に入れられてしまう。

あなたは五十円玉をできるだけ多く書店のレジに収めさせたかった」

「……その理由も説明してくれるんだろうね」

もちろんです、と答えて僕は続けた。

「レジに入った場合と入らなかった場合の違いはなにか。レジになればその硬貨は釣り銭として使われません。一応レジの五十円玉が減れば使われる可能性はありますが、新しいパッケージを空けるのが普通ですからあまり期待はできないでしょう。少な過ぎては使われる確率が下がるので、そのバランスを考えた数が二十枚なんじゃないですか。

自分が持ち込んだ五十円玉を釣り銭として使わせたかった、これはすなわち店に来る他の客に渡したかったということです。あの書店でだけ両替をしていた理由もここに 있습니다。

毎週土曜日に書店を訪れる特定の人物に五十円玉を渡したかったからだ。それも本人に気づか

れずに」

中川さんは僕の隣に戻ってきた。自分はもういいのか、マグカップは持っていない。

「—誰に？」

「なぜ五十円玉なのかを考えれば特定できます。その人物は確実に五十円玉をお釣りとして受け取るからです。つまり毎回買う物が決まっていた人物です。なおかつどのように金を払うかも決まっていました。そうでなければ五十円玉を受け取るという予想は立てられません。更にあなたが両替を行ってからあまり時間をおかずに訪れるという条件も加えることができるでしょう。時間が経つとあなたが渡した分がなくなる可能性が出てきますから。

それに該当する人物を一人知っています。雨宮鈴です。実は僕、彼女のクラスメイトなんですよ」

彼の顔が少し引きつった。

「雨宮は決まって毎週土曜日に二冊の漫画雑誌を購入していました。二冊合わせて六百五十円です。おまけに彼女は日頃小銭を持ち歩いていませんでした。

したがって毎週土曜日のあの時間帯に、雨宮が百円玉三枚と五十円玉一枚を受け取ることは彼女と多少親しい人物ならば予想できることです。彼女はここの常連だったそうですね。あなたは両替を通して雨宮に五十円玉を渡していたんだ。

ではその目的ですが—」

「待ってくれ、えええときみは……」

二丁です、と僕は答えた。そういえば名乗っていなかった。

「二丁くん、もう……勘弁してくれないか。そこから先は……取引には応じるから」

ここまで来て、なに言ってやがる。

「一つ引かかる問題が出てきます。雨宮は五十円玉だけではなく百円玉も受け取ります。その期待値は同じ。

ではつり銭として渡す確率が低くなるにも関わらず、なぜ百円ではなく五十円だけなのか。そこからあなたの目的を推察することができます。

このコーヒー、確か一杯五百五十円ですよ」

僕は残りを飲み干した。

「彼女は雑誌を買ってここでコーヒーを飲むのが好きだと言っていました。雑誌を購入した後彼女は五百五十円の買い物をするわけです。先ほども言いましたが雨宮は小銭を身につけない主義でした。使える小銭は使いきろうとするでしょう。

つまり支払に毎回千円以上の紙幣と五十円玉を使っているはず。一度渡した五十円玉があなたに戻ってくることになります。

だから百円玉は両替に使われなかった。百円玉は三枚しか手元にはないはずですからあなたの手元に戻ってこない、だから五十円玉だけでなければいけなかった。

あなたは一度書店のレジに硬貨を入れさせ、なおかつそれを回収したかった。あなたが両替を行っただけで犯人であることが裏付けと言えるでしょう。

ではそうして戻ってきた硬貨と普通の硬貨の差はなんなのか。基本的にはなんにも変わりません。

レジを通して戻っていったこと以外はね。だからその一連の現象の中にあなたが硬貨に加えたい属性があったはずです。具体的に挙げると、

一、レジを受け持つ店員、前原さんが手を触れた。

二、雨宮鈴が手を触れた。

このどちらかの事実が欲しかったわけです。結論から言うと後者は否定されます。

後者が真の場合、説明したような手順を踏んで五十円玉を回収する必要はありません。彼女は放っておいても店に来てコーヒーを飲んでいくのですから、なにもしなくても手を触れたという属性を持つ物が手に入ります。前原さんが手に触れた物が欲しかったんでしょう？」

息継ぎをした。

「まだ終わりませんよ。それだけならば、この場合もこんなややこしいことはしなくていいはずです。なにか買い物をすれば購入した本やお釣りに属性が付加されるからです。とすると、先ほど否定した後者の条件と対等であり、どちらにおいても行為の必然性が消失するように思えます。けれども事実として起きている以上それは誤り、これは前提。これまでの推論から少なくともどちらかは肯定されなければならない。

一連の行為に必然性があるパターン、それは事前に準備しておいた物体に手を触れさせたかった場合です。

後者ならば仕掛けをマグカップなどに行うことができますが、前者ではなかなか難しい。極普通に起こりうる現象（買い物など）の結果、前原さんからあなたへ物が渡る場合はあらかじめ書店にあった物しか中川さんの手に渡りません。よって前者は生き残ることができる。

ではその仕掛けとはなにか？

中川さん、あの五十円玉に色々と"いたずら"しておいたんじゃないやありませんか？」

中川さんは大きく息を吐いて額に手を当てた。脂汗が滲んでいる。

「まとめましょう。あなたが五十円玉を二十枚両替したのは、そうすれば前原さんに"いたずら"した物体に触れさせることができ、それを回収してあなたの欲求を満たすことができるから。

僕の推察は以上です」

彼は立ち上がるとカウンタに入ってレジを開けた。

「.....幾ら欲しいんだ」

「別に無茶な要求はしませんから、安心してください」

僕は彼に微笑みかけた。

「実は、バイトを辞めようと思ってるんです。待遇は悪いし、時間の都合はつかないし。その分の損失を補填してくれるだけで結構です。月三万ってところですか。僕が今の学校を卒業するまで結構、占めて六十万程度ですね。良心的でしょう？」

僕はふと、前原さんの肉感的な体を思い浮かべた。雨宮に劣らず、彼女もまた魅力的な女性だった。

「—それと、僕を店に置いてくれませんか？ 週一回、土曜の午前中だけ。レジ打ちなら、任せておいてください。

最後にもうひとつ、あの変装用具、僕に貸してくれませんか？」